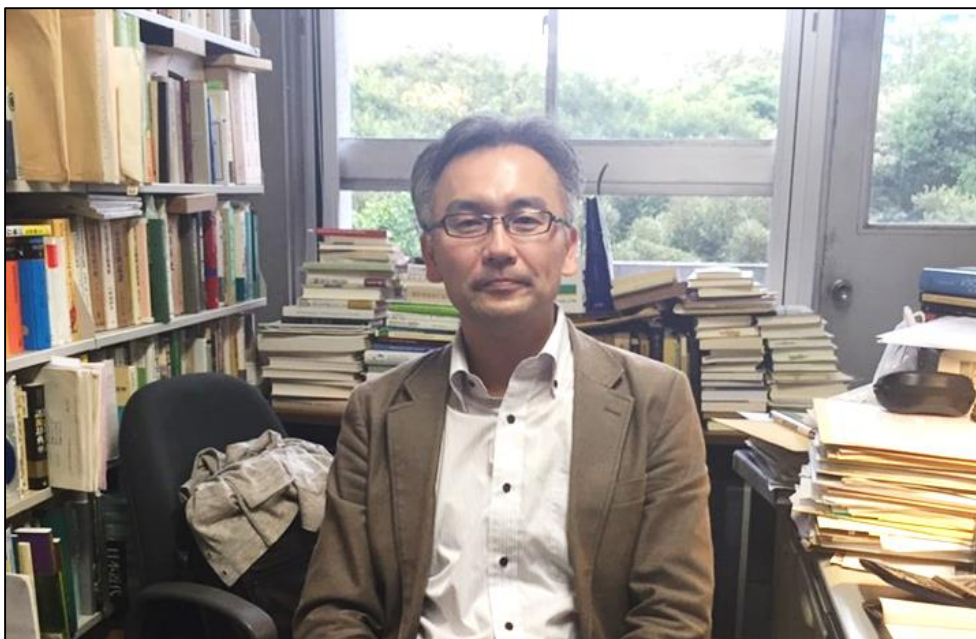


飯田 恭 教授

専門：経済史

(インタビュアー：郭)



Q.自己紹介からどうぞ宜しくお願い致します。

「日吉で必修の授業を2つ程受け持っていますので、お会いしたことのある学生も多いかもしれません。専門は経済史です。特に西洋経済史、慶應では欧米経済史と呼ばれるものです。その中でもドイツをフィールドに、農村や林野の歴史を研究しています。」

Q.何故ドイツなのでしょう。

「学部の3年生の頃にはインドに旅行し、アジアの研究をしようと思ったりもしていたのですが、何故でしょうね(笑)。・・・2つくらい答えがあるかも知れない。1つは、インドは当時〔1980年代末〕、発展途上国の代名詞であり、日本は羽振りのいい先進国でした。一般的な力関係としては、日本がインドに援助をするという構図だったのですが、僕はそれが偉そうな感じがして、嫌だったというのがありました。日本は明治以来、西洋に技術や社会制度を学ぶと

いう形で、西洋にある種のコンプレックスを抱きながらキャッチアップをしてきた。日本はいまだに色んな課題を抱えた国であって、他国から学びつつそれを何とかしなきゃいけない国なのだ。僕の中にはそういう感覚があり、西洋は日本にとってのモデルたりうると思っていた。そして、僕のゼミの先生がドイツを専門とする先生だったので、とにかくドイツをやってみようということになりました。もう1つは、テーマはある意味何でも良かったと言うか、始めから答えがあつたらやる意味が無いじゃないですか。この為この国のこういうことを調べるんだ、とかが全部わかっていたら。だから、とにかくある分野に入ってやってみて、やっているうちに自分ならではの切り口とか、問題意識がでてくるだろう、という楽観的な意識があつたんですね。勉強してなかつただけとも言えますが。そういう中で、とりあえずドイツで良いか、という風になったのだと思います。」

Q.それをずっと続けてこられたということは、やはりドイツを研究することと運命的なものがあつたのでしょうか。

「どうなのでしょう（笑）。運命的なものがあつたのかどうかは分かりません。僕らはバブル世代ですから、学部4年生のとき、周りの友人たちは皆内定をいちはやくとして春には就職先が決まっていた。そういうチャンスを捨てて、大学院に進む、というのはおよそ変人な感じがしますよね（笑）。だから、こんなので良いのかな、と本当に悩んだけど、いいや、やってみようということになった。それだけのことです。」

Q.勉強に対する熱意が凄く伝わります。

「でも本当に自分が研究者に向いているのかはやってみないと分からないよね。卒業論文は書いていたけど、それは歴史の分野では単なる手習いくらいのものだったから、自分が本当に研究者としてやっていけるかなんて全然分からなかつたですね。賭けですね、凄く不安がありました。多分企業に勤めても、自分はいまうまくいかないだろう、もっと自由にやりたい、という感覚があつただけですね。」

Q.先生は麻布高校ご出身ですが、そういう校風の影響もあつたのでしょうか。

「よく調べましたね（笑）。どうでしょう。でも、自由な校風を謳っている高校

なんていっぱいあるでしょう（笑）。その中に自由な人もいれば、そうでない人もいて、麻布高校だけが特別という訳ではないと思いますよ。」

Q.先生の教育理念について教えてください。

「学生をどうこうでなく自分がどうあるべきか、ということなのですが、教師である自分が真に研究を楽しんでなきゃ駄目だと思います。僕は授業を通じて学生に研究成果を伝えるわけですが、自分が本当に楽しいと思っていなければ、学生も聴いていてつまらなくなってしまうと思うんですね。だから、自分が自由に研究して、それを楽しめているか、それにかかっていると思います。大学にいる我々はとりあえず学問の自由を享受しています。自由な関心に従って、自由に問題を設定して、対象も方法も自由に選んで分析する。そういう自由な仕事を享受できるのは、ある意味特権だと思うんですよ。だから、研究者にはそのありがたい特権を使い尽くす義務があると思います。次から次へと内から興味が湧いてきて、主体的に研究をし続けられる能力、研究者にはそれが求められるのではないかと思います。」

Q.教育者と研究者とは別物であるという考えなのでしょうか。

「そうではなく、教育と研究は、自分の中では全く分かれていなくて、自分の研究成果とか自分の分野の研究成果を学生たちに伝達するというのが仕事なので、それを面白いでしょ？という風にしゃべれないと駄目だと思うし、そのことを学問の自由が保障してくれるのだろう、ということですね。」

Q.先生の学生時代についてお聞かせください。

「さっきも少し触れたように、はじめから研究者だ、という風に思っていたわけではなかったし、不安を抱えながら、ほとんど賭けのように大学院に進んだのですが、勉強はまじめにやっていたと思います。全部をまんべんなくとは言いませんが、少なくとも自分の関心のある分野には真面目に興味をもって取り組んでいましたね。それ以外には、バンドを組んで、曲を作り、演奏していました。楽器は小さい頃からやっていたピアノでした。高校1年生のときから、7年間くらいやったかな。僕が曲を書いて、高校時代の友人が詞を書いて。数十曲くらいは作りました。ロックとも言えるし、ポップとも言えるようなもので、新曲が少しできると小さなライブハウスで演奏しました。当時はカセットテー

ブに録音した訳ですが、今はもう伸びきっちゃったようなデモテープが1、2個残っているだけで、音源はほとんど消滅してしまっていますね。全くの夢想到に終わりましたが、ミュージシャンになれたら、などと思っていました。今でもまだその下心はあるのですが（笑）。ともあれ僕の音楽活動はいまやその伸びきったデモテープとして僅かに形を留めているに過ぎない訳なのですが、最近授業をやっているときに、昔ライブをやっていたときの感覚が甦ることがあります。というのは、ライブって、自分がノッていないとお客さんはつまらないでしょ。自分の中に電流が走るような良い曲が出来たときは、演奏していてノってくる。それと同じで、自分がノれるテーマ、話題で話をしたときには、学生もノってくるのが分かる。講義がライブのように思えてきたわけです。ただ、そうなるにはだいぶ時間がかかって、1998年に初めて教壇に立ったころはまだ怖くて、レジュメをちゃんと作って、それを読んでました。音楽は全く飯の種類にはならなかったのですが、それが今につながっている。つまり無駄なことではなかったんだなって、今になって思いますね。熱中すること、熱中できることがあったのは幸せなことです。」

Q.ゼミを志望する二年生に求めるもの

「あらかじめ二年生に何かを求めるというよりは、ゼミに来た人たちの持ち味とどのように付き合っていくか、が僕にとっては重要です。最近、農業史だけでなく林業史にも興味が広がってきて、ここ数年、ゼミでは森林の歴史をメインにやっています。日本には資源が無い、と良く言われていますが、森林史をやっていると、本当にそうなのかと思いますね。資源が無い、というのは、山林から薪や炭を採ってきて使っていた時代が終わり、石炭の時代も終わり、石油や天然ガスやウランを使うようになった現代日本における常識に過ぎず、その狭い視野から日本が資源が無いと言っているに過ぎないのだと思いますね。日本は今なお国土の3分の2が山林で、木が生い茂っている。グローバルに見れば、木を燃料として使っている地域はなお多いし、かつて木材から化石燃料にエネルギー転換を遂げたヨーロッパ諸国では、これからは再生可能エネルギーだということで、木質バイオマスという、森でとれるエネルギーに回帰しているところもある。そういう観点から見ると、日本は資源の宝庫であるともいえる。日本は資源がないという狭い視野から出発するのではなく、広く勉強する中で、自分の常識を破って行く。そういうことはワクワクすることだし、ゼ

ひ皆さんと共有したい。皆で本や資料を輪読して、今まで知らなかった事実や、考えてもみなかった事実の連関を知る。或いは、各人が自分のテーマを調べていたらこのような意外なことが分かったと報告し、驚きを共有する。そして新しく知りえたことをきちんと三田祭論文や卒業論文にまとめる。それが大学で、学生も含めてやるべき知の生産なんじゃないかな。そういうことをゼミで皆さんとできたら良いなと思っています。」

Q.二年生に対するメッセージをお願いします。

「先ほども言いましたが、当たり前のように存在している事実の中にも、驚くべき事実というのが沢山潜んでいると思うんですよ。事実は小説よりも奇なり、とも言われますね。社会科学というのは、社会の中で発生した事実を扱う訳ですが、自分の中にある既存の認識枠組みから自由になって事実をよく調べてみると、驚きの発見が沢山有る。それは凄く楽しいことです。新しい事実を発見したり、新しい見方を発見したりする。それが「知の生産」です。例えば農家の人々は、日々の労働を通じて有用な農作物を生産し、我々に送り届けてくれている。それと同じように、僕らは大学での日々の勉学を通じて、新しい事実やものの見方を発見し、その知を形（論文）にして、社会に送り届けなければならない。そういう意識を教員のみならず学生も持たないと大学が大学でなくなってしまうと思います。言われて仕方が無いから勉強するとか、これは就職の為に役に立つから勉強するというのではなく、自らの自由な関心と柔らかかな感性に従ってよく調べ、新しい知を生産する、この大学本来の仕事に学生の皆さんにも参加してほしいと思います。」

—有難うございました。

文責：郭 日恒